

## 足利報告に対するコメント

——変革期の歴史地理に関する基本的視角——

山田安彦

### I. 「変革期」の語義

日常的に理解して用いている語彙でも、改めて語義を問われれば調べてみたくなる。変革とは何という意味なのか。変革に関する類似語は多い。変動、変化、変幻、変形、変換、変改、変更、変易、変異、変移、変遷、変貌、変容等々、思いつくままに書き連ねてもこれぐらいはある。

ちなみに、諸橋徹次の『大漢和辞典』を繙いても、大体においてその漢字の意味通りであるが、変革とは根本から変わり改まることであり、あるいは根本より変え、改めることを意味し、改革ともいわれる。

一方、小学館発行の『日本国語大辞典』により変革に関する類似語のそれぞれをみると、いずれも若干の差異はあるが、姿・形、内容が変わるか、あるいは変えるという意味である。ただ、そのなかで変革というのは、社会や制度などが根本から変わるか、あるいはそのようにするという意味である。

さて、そうすると、社会経済組織や政治体制が根底から変わることを変革というが、根底から変わりつつある時期を変革期というのは当然のことであり、安定期を迎えるまでの時期をいう。

ここで注意すべきは、社会経済史的変革と歴史地理的変革とは、必ずしも同じ速度ではない。前者が根底から変革することによって、後者の地域的事象が徐々に変貌する。この変革し、変

貌する過程の内容と様相の把握が本稿の役割である。

### II. わが国の変革期の概観

わが国の歴史の進展を通覧して、変革期について考えてみる。わが国の歴史を大きく分ければ、いうまでもないが、一般的に先史、古代から中世、近世、近代、現代へと歩んできた。しかしそれらの時代はさらに小区分される。古代は、さらに奈良と平安に分けられ、平安期は約400年続くが、そのなかに天皇親政、摂関政治、院政、平氏政権の時期が含まれる。そのそれぞれの時期は公家という階級が政権を掌握していたので、それぞれの時期には共通の価値観を持っていた。ところが平氏政権が成立してくると、公家勢力と併存しながらも次第に強化して、政治面だけでなく、社会文化にも支配権力を確立しようとするようになってきた。これが封建の萌芽である。

つぎの中世、近世は封建制の時代で、くわしくは鎌倉、室町、戦国、江戸の各時代に分けられる。これらの時代に共通する価値観は、武家という支配階級が政権を独占していたということが基底にある。これに対して若干説明を加えるならば、平氏政権から室町末期までは武家勢力が次第に公家権勢を圧倒し、その基礎となった荘園制を崩壊させる過程が封建制の前期であり、いわゆる中世に対応する。

さて次代は、織田・豊臣両氏の全国統一による政権成立から江戸幕府末期までで、封建制の

後期といわれる。この時代はいわゆる近世に対応する。この時期の大きな特徴は中央集権的封建体制が完成し、商業資本が著しく台頭してきたことにある。制度的には封土関係と身分関係を整備し、農村経済を組織し、商業資本の勢力を封建的権力に従属させたのである。

ところが1830年頃、つまり天保年間から幕藩体制は国内では飢饉の群発、国外面では欧米勢力の接近、いわゆる内憂外患によって大きく蕩揺し始め、遂に明治維新により打破された。その結果、天皇を頂点とする強固な中央集権的統一国家が形成された。なお、立憲政治を基底とする体制を整備しようとしたが、議会制民主政権は十分に発展せず、政府の保護育成の下に資本主義が歪みを持ちながらも成長を遂げたといえよう。これがわが国の近代社会である。

さてそのような変則的な発展を展開したわが国は1930年前後、つまり昭和に突入した頃から、対外危機や経済恐慌の影響の下で、軍部を中心にして政党政治と協調外交を打破する動向が高まり、遂に満州事変をきっかけに太平洋戦争に至る。いわゆる15年戦争へと暴走するのである。それとともに政党政治は崩壊し、軍部中心の支配体制が形成された。しかし、敗戦となった。その結果、外的な示唆もあったが、主権在民、平和主義、人権尊重の三大原則を掲げ、民主主義国家、平和国家として再出発することになった。それが今日のわが国の繁栄と平和の基を築いたのである。

要するに、わが国における大きな変革期は政権相当の階層的交代期であり、またその時に応じて価値観の変動を伴うのである。

まずは、古代の公家政権体制から封建制への変革、すなわち平安期から鎌倉期への変革期である。

つぎが、封建制から近代への変革、すなわち江戸時代から明治への変革期である。この時代は、前述したように2期に分かれる。下剋上の戦国の世から織豊の全国統一の時期を境として、封建前期と後期に分ちうる。

そして、第二次世界大戦の終戦を境として、

主権在民の新しい平和国家へと変革する時期である。

結局、封建社会の時代を二分すると、4大変革期となる。これらの変革期は、国をあげての内戦か、民族の運命をかけての対外戦争という激動によって新時代が発生した。そのいずれの変革期も、政権争奪と盛衰に国民の全生命と全財産を注ぎ込んだのである。

しかしその結果、国民は政治の空白と経済の貧困を、さらに加えて価値観の喪失、あるいは甚大なる転換を余儀なくされた。時代によって価値観が異なる。時の価値観はその時代の政治権力によって形成され、民衆に強いてきた。変革期を生きてきた民衆は、政治の空白、経済の貧困、価値観の喪失と転換による人生生活の不利と不足、哀愁などすべての「負」の状態を、個人という自分の力で償って生きていかなければならないのである。

したがって変革期というのは、政権担当の階層的交代が始まると、政治的混乱、経済的貧困、それに伴う価値観の喪失と激動により国民生活は不安定となり、社会生活は苦悩し耐乏する時期をいう。この時期を経て安定期を迎える。

### Ⅲ. 変革期とアイデンティティ

第二次世界大戦終戦後の変革期を経験したわれわれは如何に対処してきたか、時には反芻するのも教訓になる。政治の空白、経済の貧困と混乱、さらには従前の価値観の瓦解の世の中で、最大公約数的に誰もが抱いた願望は何であったか。反戦であり、平和であり、生命の尊さであり、生活の安定であった。それぞれの胸の想いは多少は異なるだろうが、個体維持と種族維持は否定しえない。それらを如何に維持するかが問題であり、ここに「生きがい」が命題として浮上してくる。

「生きがい」とは容易に解題しうるものではないが、ごく一般的にいえば、自分の希望や理想に向かって努力し、それを実現化しようと積極的に対処する姿勢を認識する歓喜である。それはもちろん、個体維持の意義でもある。「生

きがい」とは生きていくことの意義であり、喜びを見出して感じる心の支えであり、個人的感情の経験である。その目的には相対的な意味が生ずる。自分の努力が認められるであろうという期待と確信に誘導され、多少の困難にも挫折しないで生きようとするところに崇高さがあり、したたかさがある。これがまたアイデンティティの確立に繋がる。

社会の組織と構造のなかで、自分という個人の存在が如何なる意味を有するのか。その社会的な位置づけ、自分の存在的意義に伴う価値と役割を確信することがアイデンティティである。これが「きがい」に繋がる。

そうすると、変革期における歴史地理のなかでのアイデンティティとは何か。それは地域という土地空間の生活実態を舞台として、つぎのように考える必要がある。

時間とともに様々に変化・変容する地域、換言すれば科学技術が進歩・発達すると、まず土地利用が変化し、地表面の環境が変容するので、地域というものは時間によってカテゴリーが異なることになる。そのように変遷する地域のなかで、地域の事実性を認識し、確認する。そのなかであって、その時のその地域（土地）における自分の存在意義は何なのかを自覚する。つまり端的に言えば、己が己である所以は何なのか。己が己である所以は「きがい」に通じると筆者自身は考える。

つぎに、時間の推移のなかで、地域の生活・生産・技術、それに加えて歴史への参画者としての自分をも含めて、総合的に地域の現実的感覚を体得する。

第3には、事実性の確認、現実感覚の自覚というものを背景にして、その時のその地域のなかでの実存性を確認する。そうすることによって、その時のその地域での自分の存在を認識し、自分の生活の三世<sup>ユスモス</sup>を確認する。これによって人は目的に向かって積極的に、また活気的に生活しようとするのである。

以上のように考えれば、変革期には人は思想的に混乱し、思想的に価値規準が蕩揺するなか

で苦悩しながらアイデンティティを確立しようと努力する。確立する頃には安定期への萌芽を迎えることになる。また一方、そのような変革期にこそ人間性の追究、あるいは生活基盤の安定のために文化的（人間の精神的活動により創造されるもの）、文明的（生活様式の発展進歩を形成するもの）な本質的基礎が構築されたのではないかと考えられる。巨視的にいえば、日本文化の本質的な基礎面は、いわゆる中世に形成されたのではないか。

#### IV. 変革期と宗教

さて、大いなる時代の変革期の混乱、貧困、思想的空白に生きる民衆にとって、求めるものは生活の安定と宗教の救いである。一般的に世界の歴史を見ても、大変動期に人類を救うような宗教が発生している。宗教の定義は極めて難しく、人によって、意識や思考は様々である。あえて平易に言えば、われわれの心の深層に集積された生活意識や人間の生き方、つまり人生観に基づく生活行動の方法の基盤をなし、それが精神の成熟に密接に関与すると考えられる。

ところが、宗教には顕在性と潜在性があり、一般には古代から中世にかけては、社会の各領域において全面的に前面に現出している。しかし一方、それに対し、近世から近代、現代へと移るに従い、宗教的構造や機能は複雑化し、社会的・経済的機構のなかに滲透し、融積する傾向が濃厚となる。

このように宗教は、岸本英夫によると、暖かい血のかよった現象であり、人間の心の奥底に秘められているものであるから、変革期にこそ宗教の救いを求めたのであろう。

第I変革期、つまり古代の律令の専制政治、貴族政治から平家政権、鎌倉幕府期へ移行する変革期には、貴族政治の矛盾に戦乱が頻発し、それに乗じて地方政治は混乱するとともに地方豪族や武士の勢力が増大し、社会は乱れた。この世相を反映するかのように、澆世末法の世<sup>ぎょうせいまつぽう</sup>が到来したと人々は恐れ、末法からの救済を求め、浄土信仰の新宗教へと武士も庶民も靡いたので

ある。

第Ⅱ変革期、つまり鎌倉幕府期、南北朝期、室町幕府期を経過して、下剋上の時期から織田・豊臣両氏が全国統一へと移行する変革期には、農民は国一揆や一向一揆を起こし、町衆は自治の動きを強めて行く。

一方、室町時代、15世紀に入ると、勘合貿易かんごうなどにより大陸文化の刺激を受け、戦乱の相次ぐこの時代に、水田農業、水産業、製塩業、鋳業などが発達した部分もあった。これとともに交通も発展・隆盛し、参宮巡礼などにより、道路交通が盛んになった。

16世紀中葉になると、南蛮貿易も隆盛し、加えて西日本にキリスト教が伝来してきた。貿易と布教は密接に結合しており、日常の生活文化のなかに滲透していった。末法からの救済を渴望し誕生した易行・選いぎよう・択せんちやく・専修せんしゆの新仏教すら人心を救う力に欠如していたため、魂の救いを求めていた民衆はキリスト教に傾倒した。さらには、西洋文明にも魅せられたのである。それにもまして有能で熱意のある宣教師達の献身的な努力がキリスト教の布教を発展させた。

第Ⅲ期の変革期は、徳川幕藩体制の末期から明治維新に移行する近代への黎明期である。徳川幕府は儒学、特に朱子学を保護し、封建教学としたので大いに興隆した。したがって、儒教は武家政治の指導的理念となったのである。さらに加えて林家の朱子学が独立化すると、仏教やキリスト教を排斥して神道と結合するようになる。日本古来の神道的な信仰、祖先崇拜と融合して、より日本的な儒教となる。寺請制度でらうけいの実施により、仏教は墮落し形骸化するが、仏教の庶民社会への普及と儒教の徳目とが融合し接近した。しかし、一方では儒教の排仏思想もあった。

幕藩体制も後期になると、体制の動揺にともない封建教学としての朱子学も無力化し、形式化していったのに対し、国学が発達してきた。また一方、洋学も発展してきた。これにともない医学、本草学ほんそうがく、天文学、地理学、物理学、化学などの自然科学が目覚ましく発展・進歩した。

近代工業が萌芽し、政治思想も進展したのである。このような背景を控え、幕府当局の政治経済に対する統制、指導力の無能が暴露し、遂に大政奉還へといたった。

明治になると、仏教を保護した幕府に対抗する意味もあって、明治新政府は神仏混合を禁じた（神仏分離令）のが契機となって、廃仏毀釈運動が高まり、寺院所有地を民間に払い下げたりした。また、幕末以来の民衆生活の不安と動揺に乗じて新宗教13派の教派神道が公認され、庶民社会へと弘通した。一方、これに対し、仏教側では仏教の伝統的特徴を維持しようとして深く教理を究めるようになったのである。

第Ⅳ期の変革期は、第二次世界大戦終戦による民主日本の到来の時期に当たる。新しい日本国憲法が制定され、主権在民、平和主義（戦争放棄）、人権尊重の3大原則を明白にした。これにより、思想の自由、宗教の自由も確立された。また、国家と神道は分離することになった。戦後の混乱期には多くの新宗教が発生し、今なお発展しているものもある。現在は、これらの新宗教と既成宗教との競合の時期でもあるといえる。

## V. 宗教の弘通と併起的行動

このように、民衆が不安になり動揺する変革期には、人心の救済のために信仰が必要であった。世界の歴史を通覧しても、宗教が活発に活動し、弘通すると、必ずや併起的・附随的な行動が生じている。

わが国においては、道昭（629～700）の社会事業に尽力した宗教活動、また行基（668～749）の病人の救済、用水施設の造築（溜池と水路の築造）、架橋と道路開発など、いわゆる福田思想に基づく社会事業活動が有名である。当時の仏教がわが国の水田農耕社会に適合するように改組され、現世利益を求める手段として利用されたことも忘れてはならない。

わが国の仏教の隆盛は、わが国固有の神の信仰と結合することになった。神仏習合となり、本地垂迹説が発生した。平安中期以降の社会不

安が末法思想を盛んにし、鎌倉期になると、末法の世から救済を主唱して新仏教が誕生した。ところが寺院勢力は莊園を基盤にして政治的・社会的にも強力な勢力を有したので、織豊政権はこれを弾圧した。江戸幕府の幕藩体制下では仏教は権力に抑圧されたが、寺請制度によって経済基盤は保証され、壇家を有した。しかし教義的にはむしろ後退し、さらに明治に入ると、廃仏毀釈の運動が仏教に大打撃を与えた。

キリスト教の伝播は、ヨーロッパに起きた宗教改革の影響ともいえる。新教に圧迫された旧教が、布教の新天地を東洋に求めたのである。1549(天文18)年、イエズス会のフランシスコ・ザヴィエル(Francisco de Xavier, 1506~1552)が鹿児島に渡来してから、急激にキリスト教が発展した理由は既述しておいた。キリスト教の普及は生活文化の技術、医学、本草学、天文学、地理学などの知識と技術を同伴したので、定着することも容易であったといえる。しかし、強力な信仰と団結とは封建支配者にとっては重大な脅威となり、キリスト教の禁制に至った。

もう一つ大きな影響を齎したのは儒教であるが、わが国では宗教というより、むしろ道徳の学として発達した。また儒教の有する合理的、現実的傾向は、種々の学問に大きな発展の契機を与えた。歴史学では、確実な史料に基づく歴史の解釈考証が進展した。自然科学面では、本草学、農学、医学、天文学、数学などに実証的精神の発露がみられ、実験的、臨床的方法の萌芽が生じた。一方、儒教は封建社会を維持させた。それは、儒教は君臣・親子の名分を正し、根底に義務、礼節、勤勉を尊重したからである。これは、今日、わが国の伝統的倫理観となった。このような気運が、科学、技術、経済と融合して、生活環境に貢献するような認識を深めたのである。

要するに、変革期の貧困・空白・虚無による民衆の不安と動揺を救済する最大の力は宗教にあるが、これは単なる信仰的精神活動だけでなく、宗教と併起的・附随的に行動する経済的、

生活文化、技術的、学問的な諸事象、すなわち実生活に係る諸技術や知識が導入されたのである。

わが国の場合、島国であるから、変革期に不安と動揺があっても集団的に移動することが出来ず、移動するとすれば他地域と摩擦を生ずることになる。そうするとさらに疲弊することになるから、その土地・地域に適合した開発を求めて新しい生活を創り出す以外に術はない。換言すれば、地域主義に基づき、地域のアイデンティティ(生きがい)を求めて変革期を乗り切ったのである。それが開発であったり、特産物の開発であった。

## VI. 宗教と権力と悲哀

古来、わが国には日本固有の神の信仰があった。神は宇宙の至る所に存在すると考えられ、水田農耕が基底となるわが国では農耕の普及に伴い、自然現象や動物を農業神として崇敬し、土地の精霊を産土神として、また氏族の祖先を神として篤く信仰の対象とした。そこへの仏教の伝来は、大きな驚異であった。

仏教は釈迦の唱えた教説に基づき、理性的な思惟と実践によって、人生の真理と悟性を究明・探求しようとする。当時、宗教としての体系を認識しない民衆はこの宗教の導入に当惑した。ところが産土の神、祖先の神を信仰の対象としていた人々にとって、仏教伝来後、しばらくして神仏習合が熾となり、本地垂迹説が発生してきた。さらには祖霊信仰が隆盛したのである。これが、今日の日本文化の基底となった。しかし時代とともに、教団と社会が妥協したり、信仰が世俗化することにより、タテマエとホンネが矛盾し、それは大きく変動した。

一方、仏教とともに道教の神仙説や陰陽道の祥瑞思想の影響により、自然界(天界)と人間界の相関や融合が考えられるようになり、信仰も進展した。しかし、これは自然的秩序を社会的秩序にも比定的に同化したので、階層的秩序も重要な社会的構造の一部として考えるようになり、大きな誤謬的認識を据置くようになって

しまった。

また、封建制前期を迎えた時に新仏教が発生し、庶民の自治意識が成長し、村には惣、町には商工業者が中心となった惣が形成され、堺、博多、および平野（現大阪市）に自治都市が生れたが、永続しなかった。ここに日本の自治都市の限界がある。

封建制後期には儒学が興隆し、封建的社会的秩序と階層の倫理の基礎を明確にして、約200有余年が経過した。

このようにみれば、権力は常に枠組構造を強固に構成しようとするので、わが国のように封建的体制が永続すると、権力に対する隷属的心情が根強く定着する。変革期における適応も、根底には権力に対する隷属的心情の適応であったことも否めない。第二次大戦直後の安穏的適応も、それを意味するのではあるまいか。またある意味では、したたかな深層心理があることも否定しえないのではないか。

変革期を通覧して考えさせられるのは、権力把握者が入れ替っても階層の名称が変わるだけで、いつも階層の序列が存在することである。これは、わが国の歴史に限ったことではない。注意すべきなのは、階層の序列だけでなく、国内の地域に格差的配列を試み実施していることである。階層の序列、地域格差の配列を対比し、比較して幸、不幸を認識し、処世しようとするところに人間の悲哀がある。これは、封建的隷属体制のなかで形成された最も恥ずべき心情である。また、このような格差の対比比較によって、封建社会の安定を図ろうとした低次元の為政者の政策であったのかもしれない。もちろん、かかる問題は、現在では断固として廃棄されなければならない。かかる人間の悲哀という観点から変革期を観察する必要もある。

## Ⅶ. 変革期分析の歴史地理的視点

歴史地理学が時間に関する範疇を取扱うことについては歴史学と相通ずるところがあるが、対象が土地・地域であるから、歴史学とは根本的に異なる。歴史地理学が社会経済学的手法

を取り入れる場合は少なくないが、歴史地理学の対象は、社会経済史学のそれとは基本的に違う。社会経済構造が変化したからといって、それと同時に、あるいは同じ時期に地域構造が変わるとは限らない。地域構造の変化というものは、地域を構成している要素によって変化の速度が異なるので、地域構造の変容は一様ではない。

地域構成要素は数多いが、大きく分けて3部門ある。自然的構成要素、生産面や流通面を包含した経済的構成要素、政治・社会、科学や宗教などの精神生活面を含めた社会的構成要素である。それらの要素が全体として総合的に統合されて、一つの地域が形成される。したがって、地域は理論的仮説として成立するが、一方では実態として地域を把握することも重要である。実態としての地域を認識するには、理論的仮説を基盤にし、熟練した地理学的技法に基づく臨地調査により判断する必要が生ずる。

このように実態としての地域は、前述の3部門の構成要素が有機的に統合された総合有機体であるが、さらにそのなかで基礎的基幹的構成要素と、それに付随する構成要素とに分けられる。地域を時系列的変化のなかで考察すると、前者の要素は地域を形成する主導的役割を果たすもので、成長し、発展する。後者は前者に付随して変化する。要するに、変化・変容には2つの範疇がある。一つは成長し、発展する変り方、他方は成長し発展するものに依じて変わるものである。前者は基礎構造面であり、後者は要素的構造面であることが多い。生態的にいえば、前者は神経、骨格、および中枢機能すなわち三髓五臓六腑に相当するものであり、後者は頭髪、表皮、爪などである。

地域の基礎的構造の要素といえ、土地制度による土地区画・配置、道路・鉄道などの交通路、港湾施設・通信施設、水力・火力発電などの動力源施設、上下水道、灌漑施設、試験実験施設、放送・新聞などの情報施設の中核管理施設などである。これらは時代により、科学技術の進展により、規模・内容・機能や構造を進化

させたり、退化させたりする。また、時代により、それらの組み合わせ方が違うので、地の範疇が異なるのである。要素的構造の要素は、基礎的構造の要素や組み合わせ方・規模・内容・機能などの進歩・発展により付随して異なってくる。家屋、店舗および施設の建築物などがそれである。

そこで、変革期の地域について考えてみたい。変革期の社会は、権力構造が変わり、それによって価値観が喪失したり、逆転したり、さらにこれによって宗教的要素が大きくかわってくる。この時の地域についてみれば、地域には成長的に発展するものと、それに関わり要素的に変化するものがあるが、新しい権力構造によって地域の基礎構造が新体制に改革されるまでを、歴史地理的観点からの地域の変革期としたい。

権力構造の変革により政治体制が改組され、経済組織が改編されると、財政基盤の源になる土地制度が改革される。大化の改新により公地公民制に改変、土地は班田収授法により公民に班給された。公家勢力に対する武家権勢の成立から武家政権が確立するまでの過渡期には、荘園制が基本的土地支配体制であった。荘園制は貴族の経済的基盤をなすものとして発展しながら、武家勢力成長の母体ともなった。

応仁の乱以降、荘園制は崩壊し、戦国大名の一円支配の進行が推進された。その後、織豊政権の全国支配により太閤検地が実施され、近世大名の大名知行制が確立した。土地所有権は幕藩藩主にあり、農民は占有権を認められたに過ぎなかった。

明治に入ると、明治政府は財源確保の意味もあって、1873年に地租改正を実施した。第二次大戦後は2度にわたり、農地改革が占領軍により施行させられた。

このように土地は政権確立の、また国家運営の財政の源になり、生活の基盤ともなるので、土地所有、土地配分にかかわる土地区分、区画は権力体制の変化の時には基本的な問題である。土地の政治的管理や生産性向上のため、灌漑水路施設、道路整備、加えて中枢管理機能の改革

整備が実施・施行される。したがって、それらの基礎的構成要素の組み合わせが確立するまでを、歴史地理学からみた地域の変革期といえる。この組み合わせが、時代により異なることも承知しておかなければならない。つまり時代により地域の範疇が違うのである。

## VIII. 結語に代えて——私自身への反省——

変革期について歴史地理学では如何に考察し分析・接近すればよいのかということ念頭において起筆した。したがって結論というものを考えていなかったが、一応、結論に代わるものを構成したい。

変革というものは、はじめに権力構造が変わり、地域構成が変化し、アイデンティティが移り変わり、一応落ち着くのではないかというイメージを考えてみたが、くわしく調べるうちに、なかなか複雑で容易に整理することは困難となった。しかし、ここではあえて問題や変革の過程を単純化して構成することにして、変革期の分析・考察の反省材料にしたい。

土地所有・土地耕作は国家財政の源であり、また種族維持や個体維持の基底となる。その土地の所有・占有を明確にし、維持継続し、管理・生産するためには区画が必要であり、そのために境界や道路が不可欠となる。また規範や法によってそれらを安定させ、永く持続することが念願希望される。その結果、土地（所有地区画）景観は永続することになる。

要するに、変革期における歴史地理学の観点は、まず土地に視点を当て、土地所有・土地配分・土地税制などの土地制度から分析する。土地制度が変革され、改革され、確立されるまでが歴史地理学という変革の基本であり、この基本に関わり、道路、水路、関係の中枢管理機能施設が確立される。

変革により政治は空白となり、経済は貧困に陥り、価値観の急激な変化により人心は不安定となる。アイデンティティの確定が必要であるが、これは容易なことではないので、宗教が大きく介入してくることになる。

歴史的にみて、過去の農村共同体としては、共同体構成員の精神の寄り所として宗教的施設の神社や仏閣を勧請したり、建立している。また生活の基本として、土地所有や居住権を安定維持させるための規範や法の遵守のため、宗教が背後に控えるようになる。例えば、境界を越えて耕作地や居住地、つまり所有地・占有地を犯さないようにする。犯せば法律的宗教的罰を認識させるようにした事例は多い。

政治の根本は、平等性の安定にある。平等性の持分を維持し、所有者・占有者の領域を安堵して秩序を保持するには、持分地区画を明確にする境界が確実に認識され、不可侵の確認が重要である。これについて、筆者はローマンケントゥリアについて考察を展開したことがある。境界は神聖なものであり、何人も侵すことは許されない。その背後には宗教的要素があり、これと併せて古代ローマ人の社会規範に対する律義と、法に対する信頼、遵法精神の徹底により、境界線は永く維持され、土地割景観は広く永く後世にまで遺存した。詳細には、拙論「景観構成要素としての社会規範——12表法の場合」、および「古代方格状地割の比較研究——主としてケントゥリア地割と条里地割について」を参照されたい。

歴史とは端的にいつて変革である。変革によって、土地は種々に刻まれてきた。その刻まれてきた堆積が現在である。したがって、人間が刻んできた現在の文化景観は、政治・経済や技術などから分析されるべきは当然であるが、人間の生活の重要な部分を占める法・道徳・人倫などからも把握することが必要である。すでに M. Schwind は、客観的精神 objektiver Geist からの視角分析を力説している。土地景観を対象に分析する際には、経済的・社会的要因からの接近は論ずるまでもないが、土地景観が個人の創意、人間集団の創意、大衆行為（大衆行為の正当性を確認するような大衆に貫徹力を与える行為）、国家権力の決定、意識的模倣、伝統、偶然性、人種の素質、景観の魅力、自然的必然性などによって規定されているか否

かということも詳細に調査する必要があると Schwind はいう。

かかる歴史地理学の研究は一部には熱こそ発しかけているが、まだまだ光を発するまでには至っていない。

(千葉大学教養部)

#### 〔参考文献〕

大島康正「時代区分に関する諸問題」(筑摩書房編集部『世界の歴史 別巻 世界史の諸問題』所収、筑摩書房) 1962, 203~227頁。

遠山茂樹・永原慶二「時代区分論」(家永三郎他編『岩波講座 日本歴史 22 別巻〔I〕』所収、岩波書店) 1972, 165~225頁。

和歌森太郎『日本歴史』弘文堂, 1957。

笠原一男『日本宗教史研究入門—戦後の成果と課題—』日本人の行動と思想別巻1, 評論社, 1971。

笠原一男編『日本宗教史 I』世界宗教史叢書11, 山川出版社, 1977。

笠原一男編『日本宗教史 II』世界宗教史叢書12, 山川出版社, 1977。

上原専祿『歴史学序説』(大明堂, 1964) 所収の第2部「歴史学の諸問題」の第2「封建制度概念の多様性」から多くの示唆を受けた。第4の「社会経済史研究におけるマックス・ウェーバー」の論説に触発され、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳, 岩波書店, 1989) の論考からまた宗教と経済倫理の関連について貴重な教示を受けることになった。

レジ・リトル, ウォーレン・リード著 池田俊一訳『アジア経済発展の源泉—儒教ルネッサンス—』サイマル出版会, 1989。

ロイ・ホフハイムズ・Jr, ケント・カルダー著 国弘正雄訳『脱アメリカの時代—東アジア経済圏の台頭—』日本放送出版協会, 1982。

岸本英夫『宗教学』大明堂, 1964。

立正大学哲学研究室編・和歌森太郎監修『講座社会と倫理 第3巻 東洋と日本の倫理思想』日本評論社, 1965。

河合正治「中世武士団の氏神氏寺」, 藤原道一「近世における神社祭祀と庶民信仰」, 畑中誠治「近世村落における神社祭祀の制度的慣行の形成と展開」, 松岡利夫「祭祀組織と村落社会」(以上, 小倉豊文編『地域社会と宗教の史的研究』所収, 柳原書店)



1963。

エドウィン・O・ライシャワー『近代史の新しい見方』日米フォーラム, 1962。

エドウィン・O・ライシャワー「経済成長における非経済的要因 1962年度 経済成長における諸問題」第4回アメリカ研究セミナー紀要, 東北地区アメリカ研究セミナー委員会, 10~15頁。

中村 元『宗教と社会倫理』岩波書店, 1959。

E・H・エリクソン著 小此木啓吾訳編『自我同一性 アイデンティティとライフサイクル』誠信書房, 1986。

E・H・エリクソン著 岩瀬庸理訳『アイデンティティ——青年と危機』金沢文庫, 1974。

E・H・エリクソン著 五十嵐武士訳『歴史のなかのアイデンティティ』みすず書房, 1980。

竹内理三編『体系日本史叢書 6 土地制度史 1』山川出版社, 1973。

北島正元編『体系日本史叢書 7 土地制度史 2』山川出版社, 1975。

山田安彦「景観構成要素としての社会規範—12表法の場合—」岩手大学学芸学部研究年報, 20巻, 51~78頁。

山田安彦「古代方格状地割の比較研究——主としてケントゥリア地割と条里地割について」国立歴史民俗博物館研究報告, 第22集, 239~301頁。

山田安彦『古代の方位信仰と地域計画』古今書院, 1986。

Schwind, Martin: *Kulturlandschaft als objektivierter Geist, Kulturlandschaft als geformter Geist*, Darmstadt, 1948, S. 3~26.